

Title	「鼓吹」考
Sub Title	A study of "Guchui"
Author	表野, 和江(Hyono, Kazue)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.80, (2001. 6) ,p.67- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00800001-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「鼓吹」考

表野 和江

一

明代刊行の『世説新語』の中には、その序に「世説新語鼓吹」と題する一刊本がある。『中国古籍善本書目』に『世説新語三卷附補四卷』と著録されるこのテキスト（以下、鼓吹本と略称）の刊行者凌濛初（一五八〇—一六四四）は、白話短編小説集「二拍」（『拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』）の作者、また戯曲家としてその名を知られているが、同時に、万暦年間末から崇禎年間にかけて「套印本」とよばれる多色刷りの豪華本を中心に数多くの書籍を刊行した、呉興（今の浙江省湖州市）凌氏の中心的人物であった。⁽¹⁾

凌氏が刊行した『世説新語』には、鼓吹本を含めて四種のあることが知られ、⁽²⁾それらは現在『世説新語』の主要なテキストの一つとして位置づけられている。筆者は先に「呉興凌氏刻『世説新語』四種について」（二〇〇〇年、『日本中国学会報』第五十二集）と題する小論の中で、それら四種の版本の先後関係を主として考察を行い、その際、鼓吹本の

確かな刊年については不明ながら、つとに王重民が「万曆末刊」と推定した論を受けてこれを検証し「妥当であろう」と判断したが、その決定的な根拠となりうるものはないに提示することができなかった。ところが小論発表の後、泰昌元年（一六二〇）自序をもつ祁承燦『澹生堂藏書目』巻七に「世説新語補鼓吹」が著録されていることに気づき、これが万曆年間中の刊行であったことが改めて確認された。従兄凌瀛初がのちに刻した套印本『世説新語』の序には、鼓吹本は凌濛初が友人馮夢禎の死後、その秘蔵する劉辰翁・劉應登兩家批注本を入手して重刻したことが記されており、よって鼓吹本は、馮夢禎の亡くなった万曆三十三年（一六〇五）を上限として、遅くとも万曆末年の四十七年（一六一九）までには出版されていたことになろう。

ところで凌濛初が出版に関わった書で、現在その刊年が確認できるものには万曆刊本はわずかに一種、万曆三十四年（一六〇六）金陵周氏刊行の凌濛初輯『後漢書纂』十二巻が知られるのみである。⁽⁴⁾凌濛初刻本の大部分を占める套印本は、そのほとんどが刊年不明であるが、しかし凌氏が套印本出版を開始したのは呉興で最初の套印本が刻されたときとされる万曆四十四年に遅れるのは確かであるので、それらの多くはつづく天啓年間から崇禎年間にかけての刊行であったと考えられる。つまり鼓吹本は、凌濛初自身が刊行した書の中では唯一確認できる万曆刊本なのであり、そしておそらくは、彼が刊行した最も早い書の一つであるだろう。

今回、鼓吹本の刊行時期と、凌濛初刻本の中での位置づけがある程度まで明らかになったことにより、前論では言及できなかったその『世説新語』刊本としての独自性、また附刻された凌濛初による序や凡例の内容に関しても、より限定された時代にテキストを置き直したうえで検討を加えることが可能となった。以下、それらの検討を通して鼓吹本出版の背景を考察してみたい。

『世説新語』は周知のごとく、南朝宋の臨川王劉義慶が編集し梁の劉孝標が註を加えた、魏晉の代表的人物に関するエピソード集である。鼓吹本（南京図書館蔵本）の序文冒頭に見える次の一節は、凌濛初がこれを出版することになった動機が、当時『世説新語』版本の置かれていた状況と密接に関わっていたことを明言するものである。

蓋し稗官家は獨だ『世説』のみ絶と称せり。何元朗は之れを衍しいて『語林』を作るも、『語林』は漫まがにして雑なれば、王元美は刪潤して『補』と化せり。『補』一たび出ずれば、學士大夫は争い佩おびて焉これを誦よむ。（中略）乃ち臨川本は流傳已に少なく、獨だ『補』のみ世に盛行す。一再伝じて後、海内に復たま臨川有るを知らず。余は慨然として旧を思ふも、顧みて新を喜ぶ者の口、一時の耳目を満たさざるを恐る。

『補』とは『世説新語補』（以下、『世説補』と略称）である。ここに言うごとく、この書は明の何良俊、字は元朗が『世説新語』を増補して作った『何氏語林』を、王世貞、字は元美が刪定し二十卷となしたものである。⁽⁶⁾初め嘉靖間に刊行されたが間もなく散落し、その後万曆十三年（一五八五）に張文柱が校注刊行したテキストが広く行われた。右の序には『世説補』が刊行以来大いに盛行したこと、ところが皮肉にもその人氣が本家たる『世説新語』の讀者をすつかり奪い、ために『世説新語』諸本の衰退が急速、かつ深刻に進行していた状況が述べられている。凌濛初はこうした状況を憂い、『世説新語』を復活させたいと思いつながら、その一方で「新を喜ぶ者」、すなわち『世説補』を好む讀者の反応を意識せざるを得ない刊行者としての実際的な立場を吐露しているのである。

とは言え、『世説新語』の刊本そのものが失われたわけではなかった。この時代、『世説新語』の古型を伝えるとされ

たのは、南宋陸游刊本を嘉靖十四年に重刻した袁褱嘉趣堂刻本に代表される、上中下三巻を各巻上下に分けたテキストである。しかし、当時行われていた『世説新語』諸本は、これにきわめていい加減な改編を加えたものであったことを、凌濛初は批判を込めて、

翻本する者は巻少なれば利を射艱きを患い、遂に分かちて八巻と為せり。巻首に餘行有れば強いて之れを刪り、少なきものをして相い湊め、巻首に缺行有れば強いて之れを増し、多きものをして相い接げり。鶴の頸は遂に短く、鳧の頸は遂に長し。(凡例)

と記し、このような改編がくり返された結果、『世説』には夙に善本有るも、耳食者は多く重ねて補い、旧本の寥寥たること晨星の若し(凡例)という有様となったため、自ら旧本を重刻したと述べている。つまり鼓吹本は、『世説新語』を本来の姿(旧本)に戻すことを意図して刊行されたテキストであったということになる。『前世説』の陽九已に極まれり(凡例)、「臨川を陽九より脱せん」(序)と見えるのは、「陽九」すなわち災難の極まった『世説新語』を現状より救い出さんという彼の決意を表明した言葉に他なるまい。

かく旧本への回帰を標榜して出版された鼓吹本について、のちの清人は、「凌初成(濛初)は既に『世説』原本を刻し、以て宋刊の旧第に復せり」(『鄭堂読書記』巻六五「世説新語補四巻」の条。カッコ内は筆者の補記)、また「惟だ呉興凌初成の原刻のみ、悉く古本を遵る」(承德堂刊『世説新語補四巻』康熙十五年章紱序)等と、おおむね凌濛初の功を評価する。けれども同じ『鄭堂読書記』が、「尚お未だ俗を免れること能わず」(巻六三「世説新語三巻」の条)と不満をもらすのは、その刊本が「旧本」には無い要素を付加したためであった。

冒頭に記したごとく、鼓吹本は『世説新語』三巻に『世説補』四巻を併せて一帙とした書である。旧本から鼓吹本へ

と付加されたのは、言うまでもなく『世説補』四巻と、さらに『世説新語』三巻の欄上に附刻された評、いわゆる眉批であった。ところで『世説新語』三巻の前付けには眉批の諸家名を列挙して「鼓吹諸家姓氏」（傍点筆者）と言い、また『世説補』四巻の各巻首にも「世説新語補卷之幾鼓吹一」と題することから、このテキストの序題である「世説新語鼓吹」の「鼓吹」は、これら眉批と『世説補』を指す語と知れる。では、そもそも「鼓吹」とはいかなる意味であろうか。

序には、「鼓吹とは『世説』の語に取りて之れを名づくなり。按ずるに、孝標は鼓吹を解して羽翼と為せり」とあり、『世説新語』文学篇の「二都二京、五経鼓吹」に劉孝標が「羽翼」すなわち補助するの意と注するのによつて命名した、と説明されている。とすれば眉批と『世説補』は、旧本『世説新語』を補助するという役割を担い、敢えて鼓吹本に附されたことにならう。以下、眉批から順にやや詳しく見て行くことにしよう。

「鼓吹諸家姓氏」には、『世説新語』評をもつて小説評点の開祖とされる宋の劉辰翁のほか、明人十一名とその引用書目が挙げられており、およそ古今の主要な『世説新語』評を集大成したものと知れる。今、巻上之上の眉批を数える⁽⁸⁾と、劉辰翁八十六条を最多として、以下、王世懋⁽⁹⁾三十三、凌濛初三十、劉本註三十、王世貞と楊慎各二、その他六と、ほぼ上位四名の評でその大部分を占めていることがわかるが、ここに濛初自身の評が、しかも相当数配されている点は注目される。

本文に評や圈点を附刻する「評点本」は、宋代に始まり明代には盛んに出版されたことが知られ、明末に至つて凌氏らが刻すようになる套印本の代表的なテキスト形式ともなつた。⁽⁹⁾現在確認できる凌濛初刻本およそ三十種のすべては、墨印・套印を問わずこの評点本であり、評は彼の刻書において一貫して重要かつ不可欠な要素であつたと言えるだろ

う。しかしながら凌濛初自身が評を附した書となると、その数は決して多いとはいえない。

管見の限り凌濛初評を附す書は、凌刻本以外の刊本を入れても全部で七種、しかもこのうち四種は自著であり、鼓吹本のごとく名家による既存の評がある中で彼自らが筆を執ったのは、他に『西廂記』『琵琶記』の戯曲本二種があるのみである。⁽¹⁰⁾ 鼓吹本には「不佞濛初、字は初成も間に一二の鄙見の例有り。諸君子に従い字を上方に稱す」(「鼓吹諸家姓氏」、あるいは「諸家の指陳も皆、余蘊を發明するに足れり。不佞の參攷も頗る亦功有らん」(凡例)と、その『世說新語』諸家評の集大成であることとともに、自評を交えたことが強調されているが、戯曲家でもあった凌濛初が、戯曲以外に自評を加えたという事実は、『世說新語』評に対する彼個人としての関心の高さ、特別なこだわりのあったことをうかがわせるものであろう。

ではもう一つの「鼓吹」、『世說補』四卷の方はどうであらう。各巻首に「鼓吹」と題するのは、これが「鼓吹の一部」であるとの意であらうか。『世說補』一辺倒の状況を苦々しく思っていたはずの凌濛初がこれを附刻した理由について、序文には、

元美(王世貞)の操觚は楮葉に幾し。其の『世說(補)』を以て『世說』を乱すは可ならざるも、其の『世說(補)』を以て『世說』と為すは可なれば、余は特に録して別巻と為せり。臨川は一えに其の旧に困り、元美の改竄せしものは故に復し、元美の芟除せしものは収め畢れり。

と、『世說補』は「楮葉」、つまり物マネによって真を乱すものなので、世說新語』と一つに合わせておくのはいけないが『世說』とするのは構わない、そこで『世說新語』の方は旧本通りに戻し、『世說補』は特別に別巻に収録したと説明している。『世說補』が本来二十巻であったことは先述したが、凌濛初はそこから『世說新語』の本文と重複する簡

所を除き、残りを四巻として『世説新語』に配したのである。

しかしながら、右の言い分には『世説補』の積極的意義が何ら語られていない点を指摘するまでもなく、これはもとより韜晦の辞にすぎぬであろう。なんとすれば、序文冒頭に「余は慨然として旧を思うも、顧みて新を喜ぶ者の口、一時の耳目を満たさざるを恐る」（前出）と『世説補』人気への脅威を告白したのは、ほかならぬ凌濛初その人だったからである。「幾ど百年來家絃戸誦され、梨棗（版本）は音に数十たび易えるのみならず」（『世説新語補』康熙十五年章絃序）というほどのベストセラーを、凌濛初は刊行者として看過できなかったに相違ない。なお、序文にはさらに「意うに元美は『世説』を羽翼するに足れども、『世説』には非ざるなり。合わされば両つながら傷つき、離れば並に美し」、また凡例にも「『補』は鶏肋なり。之れを刪するは惜しむ可く、之れを留めれば輒ち溷れる。拈出して別帙と為せり」と『世説補』附刻の理由を述べるが、その内容は先の消極的言のくり返しに過ぎぬこと一見して明らかである。さて以上により、鼓吹本の出版が当時『世説新語』版本の置かれていた状況と密接に関わっていたこと、および鼓吹本における「鼓吹」の実体は、おそらくは、もっぱら眉批にあつたであろうことがおよそ確認された。『世説補』の盛行に伴う『世説新語』の衰退については、他の資料にも同様の記述が見え、⁽¹¹⁾明末が『世説新語』旧本にとって受難の時代であつたのは間違いないようである。遙か魏晋を内容とする『世説新語』よりも、宋元という、明代から見た「近代」にまで時代を広げてその精粹を集めた『世説補』のほうが、より読者の興味を引いたであろうことは想像に難くない。こうした『世説補』の流行は中国のみならず日本や朝鮮にも及び、その文化に広範な影響を与えたのは周知の事実である。⁽¹²⁾

しかし凌濛初も述べるように、『世説新語』のテキストそのものが失われたわけでは決してなく、それどころか折か

らの出版文化隆盛の波にも乗り、「世説補」の流行に触発された「改編された」テキストが次々と出版されたのもこの時代であった。外でもない鼓吹本自体、「眉批」を加え「世説補」を附すという点ではそうした版本の一つなのである。そこでこの点を当時の『世説新語』諸本の中で具体的にとらえ直し、鼓吹本出版の背景についてさらに考察を加えた。

三

上述のごとく、明代刊行の『世説新語』は改編の手を加えられたものが多く、版本の特徴も一様ではない。ここでは評点の有無により「普通本系」、「批点本系」と大きく二つの系統に分け、日本の内閣文庫（内）、東大東洋文化研究所（東）、京大人文科学研究所（人）、中国の北京図書館（北）、北京大学図書館（北大）、上海図書館（上）等に蔵される明刊本『世説新語』を、刊年のわかるものはその順に列記してみよう。なお、番号が同じものは同版であり、また覆刻の関係にある書は知見の限りでその旨を注記した。*印を附す所蔵機関名は『中国古籍善本書目』の記載に拠る。

A 普通本系

- ① 正徳四年趙俊刊 八卷（中国科学院図書館*）
- ② a 嘉靖十四年呉郡袁襲趣堂刻刊 三卷（人・上）
b 万曆四年雲間王氏湘雲堂修補 三卷（上）
- ③ 嘉靖四十五年太倉曹氏沙溪覆②a 重刊 三卷（静嘉堂文庫・北大）
- ④ 嘉靖間毛氏金亭覆②a 重刊 三卷（北大）

- ⑤ 万曆七年管大勲刊 三卷 (北)
- ⑥ 万曆二十四年吳瑞徵序刊 八卷 無注巾箱本 (北・北大)
- ⑦ 万曆二十五年趙氏野鹿園刊 三卷 (上*)
- ⑧ 万曆三十二年楚藩覆②a重刊 三卷 (上)
- ⑨ 万曆三十二年鄧原岳刊 三卷 (中国西北大学*)
- ⑩ 万曆三十七年周氏博古堂覆④重刊 三卷 (早稻田大・北・北大)
- ⑪ 万曆間覆②a重刊 六卷 (上)
- ⑫ 万曆間新安吳勉學校刊 六卷 (上)
- ⑬ 万曆間新安吳中珩校刊 六卷 (東・北大)¹⁴
- 以上、評点の無い『世説新語』テキストである。主要な機関が蔵するものでこれだけの種類があり、しかもその大部分が旧本通り三巻で刊行されているのは、鼓吹本等資料の記述に照らしてやや意外な印象である。地域は、江蘇——②a、b③⑥⑩、浙江——⑤⑫⑬、その他①四川、⑧湖北、⑨福建と、ともにこの時代出版の盛んであった土地として知られる。しかしながら詳細に見れば、⑩が坊刻本(商業出版書)である他は、⑧は藩刻本、またそれ以外はほとんどが家刻本(自費出版書)と思われるので、これらが広く流布することはなかったであろう。すなわち濛初が鼓吹本の出版を企図した万曆間にあつて『世説新語』は、旧本のまま、またはそれに近い刊本は趣味的に刊行されこそすれ、商業ベースに乗るほどの人気を持ち得なかつたことが、ここからもおおよそ窺い知れるのである。なお、覆刻の目立つ②a袁褫嘉趣堂刻本(四部叢刊収)は先述した通り、南宋刊本の重刻本で、以後刊行される『世説新語』テキストはすべて

この系統に出るとされる善本である。その覆刻本が多いのは、これが早くから珍重されていたことを物語っている。では次に、鼓吹本を含む評点を附したテキストである。

B 批点本系

- (1) 万曆九年序(喬懋敬)⁽¹⁵⁾ 刊 三卷 王世懋批点 (上)
- (2) (万曆十年)⁽¹⁶⁾ 吳興(凌瀛初校覆(1)重刊 八卷 王世懋批点 (内・北・上)
- (3) 万曆十四年余碧泉覆(2)重刊 八卷 王世貞^ア批点 凌瀛初校 (中国南京図書館)
- (4) 万曆間吳興凌濛初刊 三卷附補四卷 凌濛初訂 劉辰翁等批釋 (入・上)
- (5) 天啓三年序(韓敬) 小築刊 三卷 劉辰翁批釋 『劉須溪評點九種書』収 (内・東・上)⁽¹⁷⁾
- (6) a 吳興凌瀛初刊 六卷 劉辰翁等批点 四色套印本 (上)
- b 吳興凌瀛初修補 八卷 劉辰翁等批点 四色套印本 (内・北・北大・上)
- (7) 張懋辰刊 八卷附補四卷 張懋辰訂 劉辰翁等批点 (上)
- (8) 覆(2)重刊 八卷 劉辰翁批釋 王世懋批点 (上)

そのほとんどは凌濛初が批判するところの、巻数を水増しし、旧本に改編を加えたテキストである。しかし皮肉にも、凌氏刻本四種(2)(4)(6) a、bやその覆刻本(3)(8)、さらには(7)も凌氏刻本に基づいて刊行されたテキストであり、この系統における凌氏刻本の影響はきわめて大きい。

今、評点に注目してみると、(4)鼓吹本以前に刊行された(1)―(3)が王世懋批点のみを附すのに対し、鼓吹本以降のテキストはひとしく劉辰翁評を取り入れていることに気づく。劉辰翁(一二三二―一二九七)、字は會孟、號は須溪、江西

吉安の人、南宋景定三年の進士。元代を代表する評点家であり、明代にはその主要な評点本をまとめた(5)『劉須溪評點九種書』が出版されるなど、人気の高かったことが知られる。凌濛初がその刻書活動において、劉辰翁評点本を意識的に収集出版していたと考えられる点については以前拙稿において論じたことがあり、鼓吹本はそうした彼の刻書の方向性がごく初期の段階からすでに見られたことを示すものとして興味深い。

さて、これらのうち刊行時期が特定できない(8)は措くとして、(6) a、b、また(7)も凌濛初評が配され、鼓吹本に拠ったことの確かな刊本である。なお(5)は韓敬序によつて楊謙西の刊行と知れるが、杜信孚編『明代版刻綜録』によれば楊謙西は凌氏と同じ呉興の人であつたという。これが正しければ、その刊行に際し鼓吹本の存在は当然意識されていたであらう。

ところでこれらは明代における『世説新語』への劉辰翁評の附刻が、鼓吹本の出版を機として広く行われるようになった可能性を思わせるものである。むろん、わずか十種足らずの現存テキストのみで速断はできないが、しかしこれが全くの憶測とも思われないのは、当の鼓吹本の凡例に「『世説』は補刪を為すものには、遂に須溪の批無し。今、須溪本を致じ上方に増入す」という一則が見え、これを信じれば、少なくとも凌濛初の知る範囲では、当時流通していた改編本『世説新語』の中に劉辰翁評を附すテキストはすでに無かつたことになる。(6)套印本の凌瀛初序文には、馮夢楨秘藏の劉辰翁・劉應登両家批注本を入手して鼓吹本を刊行した凌濛初が、「向年蠹簡殘編已に煨燼と成るも、今其の全きを措撫するを獲たり。良に快事為り」と「欣然として」言つたと記されており、右の凡例一則が単に宣伝効果を狙つただけの言ではないことの傍証たり得よう。

とするならば、鼓吹本への眉批の附刻もまた、『世説新語』テキストが置かれていた状況の一面を敏感に捉え、反映

したものであったと言つてもよいであらう。従兄凌瀛初が聞いた「良に快事為り」という濛初の感嘆は、評の附刻も鼓吹本刊行の主要な目的であったことを、いみじくもわれわれの前に明示している。濛初にとつては眉批の附刻も、『世説新語』を復元する作業として、「旧本」に返すことの延長線上にあつたのではなからうか。「旧本」への回帰を標榜しつつ、眉批を指す「鼓吹」の語をとくに序に冠しするという一見矛盾した行爲も、このような観点から見ればよく理解できるであらう。

四

以上、鼓吹本出版の背景について気づいたところを述べてきたが、実はもう一つ、鼓吹本の凡例の中には筆者がかねてより不明に思っていた箇所があつた。それは次の一則である。

諸書には評有る可からず。評は疣贅いぼ為り、指枝ゆさ（余分な指）為り。獨だ『世説』の單詞片語のみ、本もと是れこ資を譚ちたますもの、月旦陽秋（人物批評）なれば饒舌を妨げず。（中略）前賢は獨だ其の評を為すを惡にくめば、之れに易かえるに鼓吹を以てす。鼓吹は評に非ざるなり。

評に対するこの否定的発言が、鼓吹本のみならず、評点本ばかりを刊行した凌濛初の刻書の実状に全くそぐわないものであることはもはや言うまでもない。大体、評点本の凡例にこのような評批判の一則をわざわざ加えること自体はなほだ奇妙であり、何より「鼓吹は評に非ざるなり」とは余りに牽強附会であらう。これが凌濛初自身の考えを、少なくとも率直に反映したものとは考えにくい。

そこで注目されるのが「評を為すを惡む」という「前賢」の存在であらう。これは、当時彼の周囲に、評に対して批

判的意見をもつ人物がいたことを言うものに他なるまい。しかもここに述べるごとく、その「前賢」のために評を「鼓吹」に替えたとすれば、実は「鼓吹」の称は最初から「評」の代替語として、「前賢」の非難をかわすために掲げられたものであり、『世説新語』中の「羽翼」の意は後からのこじつけに過ぎないと解されよう。しかし、凌濛初の刊行した数々の評点本とこの凡例内容との矛盾、また「前賢」とは誰かという疑問は依然として残る。

この疑問を解く手がかりとなったのが、鼓吹本が萬曆刊本であるという、今回明らかとなった事実である。この事実により鼓吹本は凌濛初が刊行した最初期の一本と推定されることは既に述べたが、『世説新語』以外の書に対する評の一切を否定した右の一則は、すなわち鼓吹本が、彼の他の評点本に先んじて刊行された確証と見なしうるのであろう。ならば「前賢」は、その頃の彼の刻書活動と深く関わっていた人物でなくてはならない。その人物と思われるのが王樾登である。

王樾登（一五三五—一六一二）、字は百穀、武進（江蘇省）の人。一生布衣であつたが能詩で知られ、文徵明亡きあと呉門（蘇州）の文壇に君臨すること三十余年に及んだ⁽²¹⁾。凌氏とは、濛初の父でやはり多くの刻書のある迪知（嘉靖三十五年の進士）以来の付き合いで、迪知が父約言（嘉靖十九年の举人）の著『鳳笙閣簡抄』四巻を刊行した際には乞われて「凌大夫傳」を撰し、そこに「通家子王樾登」と署すなど、家同士代々交際のあつたことが知られる⁽²²⁾。その王樾登が濛初のために序を撰したのが、刊年のわかる唯一の万曆刊本として先に紹介した万曆三十四年（一六〇六）金陵周氏刊行の『後漢書纂』である。時に濛初は二十七歳、父迪知の死により凌家の主人となつて六年目にあたる。そして、この王樾登の序は、正しく評に対する激しい弾劾の文章であつた。

『後漢書纂』は劉宋范曄の正史『後漢書』を、凌濛初が「纂」すなわち摘録編輯した書である。濛初を幼名で「余が

友凌玄房」と呼ぶ王穉登序はまず、六朝人が漢史を撰した『後漢書』は誤りも多く「纂」してもよいが、漢人による『史記』と『漢書』は「之れを一分増せば則ち太だ長く、之れを一分減せば則ち太だ短し」という完璧なものである。「纂」してはならないと述べ、『史記』『漢書』に対する「纂」を否定する。ついで『後漢書纂』における濛初の功を宣揚してから、議論は以下のごとく再び『史記』『漢書』へと戻り、かく言う。

子長（司馬遷）、孟堅（班固）の史は、其の文を史とし、蔚宗（范曄）の文は、其の史を文とす。其の史を文とする者は、纂せらるるは文に在りて史に在らず、故に之れを纂するは可なり。其の文を史とする者は、纂せらるるは史に在りて文に在らず、故に之れを纂するは可ならず。（中略）嗚呼。史に「例」「抄」「纂」「評林」の書出づれば、史氏の陽九に厄くるしむこと甚し。「例」に茹醜しおづけされ、「抄」に屠割はかりかれ、且つ「纂」は荆あぶり削はなし、「評林」に黜墨いれざさる。

「例」は文体を論じた書、「抄」と「纂」は節略本、「評林」は諸家評の集成である。これらは無辜の歴史書ひいては史官に五刑を科す悪玉とされ、またここには『史記』『漢書』は事実を記す「史」であって「文」ではない、「史」には手を加えてはならないという王穉登の文章観が明確に示されている。もはや言うまでもなく、もとより序の論旨は『史記』『漢書』への批評行為を非難することにあつたのである。

結論を急げば、ここに攻撃を受けているのが『史記評林』『漢書評林』『史記纂』『漢書纂』であることは疑いを容れまい。このうち最初に刊行された『史記評林』こそは「評林本」の嚆矢であり、その影響は明末の白話歴史小説まで及んだことについては既に論究がなされている。⁽²³⁾万暦年刊初めにこれらの書を次々と編輯刊刻したのは凌稚隆、迪知はその長兄であり、すなわち濛初の叔父であつた。『後漢書纂』は明らかに叔父稚隆の『漢書纂』に倣つたものであろう。

右のような序を書いた、王禪登の意図は明白であろう。

鼓吹本の刊行に当たってこの王禪登序が意識されたことは、例えば右に見える「陽九」の語が鼓吹本には旧本の置かれた現状を指す語として用いられていたように、いくつかの語句の引用にもうかがうことができる。⁽²⁴⁾若くして父を亡くし後ろ盾を失った凌濛初にとつて、文壇の大立者でもあった王禪登の存在は貴重であり、また公私にわたつて影響を受けたであろうことは想像に難くない。先の凡例での苦しい弁解は、こつとした彼の立場を端的に物語つていよう。そして、そのような弁解をしてまで評を附刻したところに、鼓吹本の評に対する濛初の並々ならぬ執着が改めて確認されるのである。

ちなみに『後漢書纂』は王禪登序を承け、評や圈点は「並に敢えてせず」(凡例)とするが、実は鼓吹本にも「圈点」は附されていない。濛初刻本の中で圈点を附さない書は他に例がなく、従兄瀛初は後に套印本を刊行した理由を、鼓吹本が圈点を欠くことが「未だ遺珠の嘆有ることを免れず」(套印本『世說新語』序)であつたからだと述べている。評と圈点ふたつながらの附刻は、凌濛初もさすがに少し気が引けたのかも知れない。

なお王禪登序について付言すれば、王禪登が非難する「史」を「文」と見なす意識は、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」をスローガンとする明代古文辞派に始まるものであつた。⁽²⁵⁾この点、『史記評林』『漢書評林』『史記纂』に古文辞派の領袖王世貞の序が附されているのはきわめて象徴的であるが、ところで王世貞は王禪登と親しい交際のあつたことが知られ、⁽²⁶⁾しかも『弇州山人續稿』卷三「四十詠」に、詩文の仲間・同類と見なす「四十子」の一人として王禪登を挙げているのは興味深い。『明詩記事』はその詩「百穀命世才、興文自綺歲」について、「賞歎恒を^{つよ}^こ。顧みるに五子の列に録さざるは殊に解す可からず」(己籤卷十六「王禪登」)と、王禪登が古文辞派の中心的メンバー「五子」に列せられ

ていないのを訝るが、王禪登が文学観の上で古文辞派に近い立場にあったことは、『史記』『漢書』に対する先の発言や、李攀龍選『唐詩選』に参評を加えていること等にもうかがい知れる。⁽²⁷⁾ 右序に見える王禪登の主張は、古文辞派周辺の人士の間でも「文」に対する意識にはかなり較差のあったことを示すものであろう。

さて、最後に鼓吹本に關連して簡単に記せば、明代ほどの活気を失った清代刊行の『世説新語』テキストにあって、鼓吹本は承德堂、寶旭齋⁽²⁸⁾という二つの書肆からその覆刻本が出されている。しかしそれらは共に、『世説補』に『世説新語』を附刻し、「増訂世説新語補」の封面を附して刊行されたのであった。万曆間、本家『世説新語』の衰退を嘆いて刊行された鼓吹本は、「新を喜ぶ者の口、一時の耳目を満たざるを恐れ」て附刻した『世説補』によって、今度は主従逆転したテキストとして清人の前に再登場したのである。——このテキストをして「豈に黒白を識る者の為す所ならんや」と譏る『四庫提要』の言葉⁽²⁹⁾を、凌濛初は果たしていかなる感慨をもって聞くであろうか。

注

- (1) 凌濛初の刻書活動については、拙論「明末呉興凌氏刻書活動考——凌濛初と出版——」（一九九八年、『日本中国学報』第五十集）参照。
- (2) 鼓吹本の他に、凌瀛初刻『世説新語八卷』、同『世説新語六卷』（四色套印本）、同『世説新語八卷』（四色套印本）がある。
- (3) 王重民『中国善本書提要』（一九八三年、上海古籍出版社）子部小説類「世説新語六卷」の条。
- (4) 『後漢書纂』のほか刊年がわかるものには順に、天啓元年刊『東坡禪喜集』（套印本）、天啓二年刊『詩逆』、崇禎元年刊『拍案驚奇』、崇禎二年刊『虬髯翁』、崇禎三年刊『孔門兩弟子言詩翼』、崇禎四年刊『聖門傳詩嫡家』、崇禎五年刊『二刻拍案驚奇』がある。

- (5) 泰昌元年凌啓康刊の套印本『蘇長公合作』の凡例に「朱評之鐫、創之閔遇五」とあり、呉興での套印本刊行が閔齊扱(號は遇五)に始まったことをいう。万曆四十四年刊『春秋左傳』がその書であると言われている。
- (6) 王世貞序には『世説』之所去不過十之二、而『何氏』之所采則不過十之三耳」とある。
- (7) 東京内閣文庫蔵本による。
- (8) 眉上の按語によると「劉本註」としたのは劉應登本中に載せるもので、宋劉應登の自注か劉孝標の原注かがはっきりしないものであるという。
- (9) 評点については高津孝「宋元評点考」(一九九一年、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第三二号)、同「明代評点考」(一九九七年、『東方学会創立五十周年記念東方學論集』) 参照。
- (10) 凌濛初が評を附す自著四種は、戯曲本の『識英雄紅拂弄揮配』と『南音三籟』、小説『二拍』がある。
- (11) 明末張懋辰訂刊『世説新語八卷』王思任序には「自弇州伯仲補批以來、欲極玄暢而續尾漸效鬻漸失、『新語』遂不能自主」、また道光七年紛欣閣刊『世説新語三卷』周心如序にも「其書(『世説補』)盛行而『世説』原本傳者寢少」と見える。
- (12) 大矢根文次郎「江戸時代における世説新語について」(一九八三年、『世説新語と六朝文学』収、早稲田大学出版部)。
また関寛東『中国古典小説在韓国之伝播』(一九九八年、学林出版社) 第二章「版本考略」および二四一頁、四一二頁参照。
- (13) 王能憲『世説新語研究』(一九九二年、江蘇古籍出版社) 第二章『世説新語』的版本、箋注與批點」における分類を参考とした。
- (14) 東文研蔵本は、その内容と合わない「劉須溪先生纂輯／世説新語補／三畏堂梓行」の封面を持つ。しかし韓国高麗大学漢籍目録にも同封面の呉中珩刊本が著録されており、簡単に誤配とは言い難い。なお北京師範大学図書館の書目にも三畏堂刊の『世説新語六卷』が著録されるが、これが呉中珩刊本か否かは不明。
- (15) この刊本が凌瀛初套印本の序に見える官刻本「豫章刻本」である可能性については拙論「呉興凌氏刻『世説新語』四種について」(二〇〇〇年、『日本中国学会報』第五十二集)で論じたが、その後、上海図書館に蔵される(1)と(2)の刊本を調査し、二本が覆刻の關係にあることが確認された。また刊年の近い江西布政司刊本である万曆六年刊『古文萬』十六

巻とその後修本、および万暦七年刊『山谷老人刀筆』二十巻に附刻される刻工名が(1)のそれと多く共通することも更に確認され、料紙(白棉紙)の特徴も含め、これが「豫章刻本」であることはほぼ間違いないと思われる。

(16) 凌瀛初刊套印本『世說新語』(6a, b)序に「壬午秋、嘗命之梓」とあるのによる。

(17) 東文研本、上海図書館本とともに単行本として蔵され、また封面も失われているが、内閣文庫蔵『劉須溪評點九種書』中の『世說新語』と同版であることが確認された。なおこのテキストには天保二年(一八三一)覆刻刊行された和刻本(官版)があり、これは専ら『世說補』が流行した江戸時代にあつて、唯一和刻された『世說新語』である。

(18) 注(一)所掲論文。

(19) 東京内閣文庫蔵本の封面に見える「小築」が、楊謙西の室名(あるいは書坊名)であるかについては不明。小築が、天啓三年楊謙西刊本を重刻した刊本である可能性もある。

(20) 現在所在が確認できる劉辰翁評『世說新語』のなかで鼓吹本より確実に古いものでは、東京内閣文庫蔵の元刊八巻本がある。阿部隆一『中国訪書志』(一九七六年、汲古書院)によると、これは劉應登の校刊本に劉辰翁の批語を補入増刻したものであろうという。

(21) 錢謙益『列朝詩集小傳』丁集中。

(22) この他、迪知が編纂刊行した万暦七年刊『古今萬姓統譜』百四十巻、万暦十年刊『国朝名公翰藻』五十二巻には序を附し、また万暦三年刊『国朝名世類苑』四十六巻と『古今萬姓統譜』では校訂の一部を手伝っている。なお凌氏と王禪登の關係については荒木猛「凌濛初の家系とその生涯」(一九八〇年、『文化』第四四巻第一・二号)に指摘がある。

(23) 注(9)所掲高津孝「明代評点考」、丸山浩明「評林本隆盛史略」(一九九五年、二松学舎大学『人文論叢』第五十四輯)参照。

(24) 鼓吹本の「評者為疣贅、為指枝」(凡例)、「鶴頸遂短、鳧頸遂長」(同)および「合而兩傷、離而並美」(序)は、それぞれ王序の「疥癬蟣蝨之余」「鳧非鶴續、既不兩傷。魚以熊捐、遂獨美」に依拠しているよう。

(25) 注(9)所掲論文。

(26) 王世貞『弇州山人四部稿』には王禪登に贈った詩や書簡が多く収められる。また『列朝詩集小傳』丁集中「王較書禪登」には、王世貞の死後、その息子士驩がある事件に連座して獄に繋がれた際、王禪登が力を尽くしてこれを救援した

と記す。

(27) 明閔氏刊套印本、李攀龍選訂、王穉登參評『唐詩選七卷』。上海復旦大學藏。

(28) 二種ともに康熙十五年章紱序を附す。なお寶旭齋刊本は韓國高麗大學の漢籍目錄に著録が見える。

(29) 『四庫全書總目』卷一四三子部小説家類存目「世說新語補四卷」の条。